

巻 頭 言



補綴歯科学会の未来へ向けて

To create a bright future of JPS

佐々木 啓一

日本補綴歯科学会 元理事長 (2009～2011 年)
東北大学 理事・副学長 (共創戦略・復興新生担当)
大学院歯学研究科 教授

このような機会を与えていただき、まずもって長きにわたる朋友でもある馬場理事長、池邊編集委員長に感謝申し上げる。本稿執筆にあたり、実のところ何度も書き直しをしたが、この3月をもって退任する私にとって、本稿が皆様に向けての最後の文章となるであろうことから、これまで、そして今、歯科補綴学、さらには歯学に対して感じていることを、誤解を恐れずに敢えて正直に記してみたい。

私がかねてから、異分野融合研究や産学連携の必要性を唱えてきたことを覚えている方も未だいることと思う。私どもの専門とする歯学、歯科補綴学、そしてそれらに基づく歯科医業は、最終的には健康、QOLに貢献することを目的とし、生命科学や材料学、加工学等、周辺の基礎的な discipline に支えられている実学領域の学問であり、材料・薬品や電子デバイスなどの製造業や各種サービス業を上流に持つ業種である。そのため私どもの発展は、これらの周辺領域や上流の進歩・発展に伴いあることは否めない。しかし自らが能動的に発展していくためには、私どもは周囲の動向を注視し、新規技術を積極的に取り入れ、さらには共創していくことが必須である、と私は考えてきたからである。ほんの少しではあるが、私自身もこのような考えに基づき研究をしてきた。私は、皆様に示せるほどの結果を残せずに去ることとなるが、歯学、歯科補綴学の発展のためには、今後、本学会が、また会員がさらに歯学の領域内に留まらない活動を行うことが重要となろう。

もちろん、昨今の本学会における多岐にわたる活発な研究活動は、一会員としてうれしく見ている。学術大会でもバイオロジー、デジタル、高齢者医療等、まさに時流に乗ったトピックスを取り上げ、歯学における歯科補綴学の存在感、そしてリーダーシップを如何なく発揮している。長年の懸案であった「広告可能な専門医」取得への道筋が整ったこともその成果であろう。歴代の理事長はじめ役員の方々の指導力と、すべての会員諸氏の研究、臨床、教育への真摯な取り組みと努力に敬意を表する。しかし治療技術の開発や機能再建等、医療として求められる技術革新や学問における一つの discipline として、これらの活動をフラットに俯瞰した際、社会から、他の領域からどのように映っているだろうか。

ICT、あるいはAI、VR、AR等の発展によるデジタルトランスフォーメーションや新薬開発等に代表されるように、科学の進歩は以前とは比べものにならないほど速い。またSDGsで謳われているように環境問題や安心安全という社会の価値観の変革もダイナミックである。私は、医学系のみならず工学系、材料系、情報系の国内外の研究者、企業との交流が以前から多く、このところは立場上、SDGs、カーボンニュートラル等グリーン社会を見据えたサイエンスパーク事業、スーパーシティ事業、さらには次世代放射光施設の運用事業、福島イノベーションコースト構想等に関わっており、これら活動を通して世界の技術革新の動向、そのスピードを肌で感じている。歯科とは全く異なった事業であるため、いろいろと情報を取り入れながら日々奮闘しているが、わが国の企業や大学、あるいはいろいろな discipline では、このような状況下を生き抜くため、また発展を賭けてアジャイルにトランスフォームしていること、またアメリカではコロナ禍を逆手に取り、リモート診療での検査や治療をはじめとする医療のデジタル化が急加速し、ポストコロナではデジタル医療はもはやデフォルトとなること等

の情報を得ることができている。

ひるがえって、わが国の歯科、歯学の動向は、どうもこのような社会情勢から大きく乖離しているように見えてしまう。本学会には馬場理事長をはじめ、このような状況が見えている方々がおられ、私の言わんとすることを理解してもらえるところもあるかもしれないが、歯科全体を見ると甚だ覚束ない。世界、わが国の社会で起こっていることや科学の先端、技術革新の動向が全く見えていないのではないと思わざるを得ない。歯学という学問の discipline の存続すら危惧してしまう。

わが国の歯学の社会的背景として、教育研究機関としての歯学部が総合大学には少ないため、社会や他の領域の動向や生きた情報が入りにくく、また他領域の研究活性や産学連携、スタートアップ活動と比較されることも少ないため、致し方ないという面もある。が、そうであれば尚、歯学の中に留まらずに、常に視野を広く保つことに留意し、積極的に社会や学問の動向を探索し、自身の立ち位置、レベルを自ら知る努力が必要となる。また他大学の他 discipline の一流の研究者との交流を積極的に図ることも必要である。

若い会員諸氏はあまり考えたことのない話ではあろうが、今後、歯学、歯科補綴学、あるいは歯科医療に携わっていくうえで、ほんの少しでいいので記憶しておいてほしい。また指導層の方々には、歯科補綴学の発展と歯学の牽引のために、少しでいいので是非実践してほしい。

会員の皆様からのこれまでの長きにわたるご支援に感謝し、本学会の発展を祈念し、稿を終える。

ありがとうございました。